

2008年9月1日

近代建築に宿る農の心

大阪ガスエネルギー・文化研究所

客員研究員 弘本由香里

優れた人智の多くは、時代の変わり目に登場しているように思う。

身近な例だが、伝統の技の豊かな土壌と、近代の新たな建築技術との出会いは、全国各地に数々の名建築を生み出した。

空間や意匠の一つ一つに、外来文化の衝撃を、自らの心と体、風土に引き寄せながら、受容していきこうとする、格闘と夢の痕跡を見えてとれる。そこに普遍的な美しさと迫力が宿るのだと思う。

とりわけ、民間の近代建築の多くは、時代の激変期に気高く向き合った、経営者たちの哲学とそれを具現化した建築家や大工・職人たちの人生を物語っているかのようで興味が尽きない。

そんな魂のこもった建物の一つを、20数年ぶりに訪ねることができた。兵庫県加古川市の別府港に面して立つ「多木浜洋館（通称あかがね御殿）」である。大正7年着工、昭和8年竣工。多木化学株式会社の創立者、多木久米次郎氏が迎賓館として建てた洋館だ。

久米次郎氏は、魚肥を商う旧家に生まれ、長じて日本の食料増産を志し、本邦初の化学肥料を開発。安価な肥料を全国に普及させ、農

業振興に力を尽くした。洋館の内
部、大広間は桃山風の格天井で、
野菜や果物の浮き彫りが鮮やかだ。
作物への畏敬の念と愛情の深さを
まっすぐに伝えて、すがすがしい。